The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪在住女子高校生の「対立ごっこ」におけるポライトネス : 「遊び」を伝える文脈化の手がかりを中心に
Author(s)	大塚, 生子
Citation	大阪大学言語文化学. 2009, 18, p. 127-139
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77829
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪在住女子高校生の「対立ごっこ」におけるポライトネス

—「遊び」を伝える文脈化の手がかりを中心に—*

大塚　生子**

キーワード：ポライトネス、文脈化の手がかり、対立

Playful conflict (my translation of the Japanese term *tairitsu-gokko*) is a frame that works as play or joking, although it is formally conflictive. I have taken some informal intimate conversations between female high school students living in the Osaka metropolitan area as my object of study. The purpose of this study is to investigate what kinds of contextualization cues work to lead to the interpretation of the frame as play from the perspective of politeness.

Tairitsu-gokko is a frame that Otsu (2004) analyzed as "conflict as play" (*asobi toshite no tairitsu*). However, Otsu only analyzed verbal communication. In this study, I analyze both verbal and non-verbal information. I also characterize contextualization cues in *tairitsu-gokko* that bring the metamessage of play by comparing them with actual cases of conflict (*tairitsu*).

I have found that the cues that enable speakers to frame talk as *tairitsu-gokko* have both verbal and non-verbal features. Verbal features include (1) emphatic meter, (2) rude expressions or vocabulary, and (3) specific characteristics of Kansai dialect. Non-verbal features include (1) laughter, (2) eye contact, and (3) gesture.

I further conclude that two opposite methods are employed to cue *tairitsu-gokko*. One is to show cooperation, and the other is to increase the apparent risk of FTA.

Examples of ways of showing cooperation include emphasis on the meter of their utterances and laughing (or smiling) to show their intention of play directly although the utterances are conflictive literally.

By contrast, as a way of increasing the risk of FTA formally, the informants often use rude expressions or imperative sentences, and some of them use a certain kind of Kansai dialect that they don't normally use. They emphasize rhythm, fix their eyes on the other,

---

* Politeness in *Tairitsu-gokko* (Playful Conflict) in Conversation of Female High School Students in Osaka: Focusing on Contextualization Cues of Play (OTSUKA Seiko)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

and point. Concerning laughter, it was observed that sometimes they don't laugh or smile in spite of the *tairitsu-gokko* being a kind of joke.

This behavior elicits the hearer's inference that the speaker can't be truly intending to threaten her positive face so strongly, therefore the utterance can't be serious but must be joking. In these ways, they exhibit positive politeness by communicating that they are joking and don't intend to create conflict.

1　はじめに

若者の会話を観察していると、些細なことで言い合いをし、互いに批判し合いながらも実際には笑い声を上げ、楽しそうにしている場面を見かけることがある。

本研究は大阪に在住の女子高校生の友人同士の日常会話を対象に、このような現象に焦点を当てるものである。つまり、相手の意見や相手自体に対して反対するという、一見互いの関係を悪化させるような発話を行いながらも、実際にはそれが関係を悪化させるどころか逆に「面白いもの」「好ましいもの」として解釈されているという点に注目する。本論ではこのような現象を「対立ごっこ」と呼ぶ。これは言語表現としては「対立」的でありながらも「ごっこ」という、「遊び・冗談」の機能を持っているものを指す。本研究は、このような「対立ごっこ」がどのようにして言葉どおりではなく冗談として解釈されることが可能になるのかを、ポライトネスの観点から明らかにすることを目的としている。

2　主要概念

2. 1　ポライトネス

本研究では基本的にBrown & Levinson（1978; 1987、以下B&L）のポライトネス理論に基づき分析を進める。

B&L（1987）は、円滑な対人関係の確立・維持のための言語行動をポライトネスと定義し、人間の基本的欲求である「フェイス[1)]」を鍵概念に理論を展開している。

フェイスには、「他者から認められたい」というポジティブ・フェイス欲求と、「他者から侵害されたくない」というネガティブ・フェイス欲求の2種類がある。しかし、コミュニケーションにおいてこれらのフェイスはしばしば侵害される恐れがある。このようなフェイスに対する侵害行為を「FTA (Face Threatening Act)」と呼び、ポライトネスとはFTAに対する補償行為、つまりFTA度合いを軽減させる、あるいはFTAを避

1) B&LはGoffman（1967）のフェイスの概念を展開させ、コミュニケーションにおける「基本的欲求」と捉える。

けるために用いられる言語的ストラテジーであるとされている。ポライトネスはポジティブ、ネガティブそれぞれのフェイスに由来し、ポジティブ・フェイスを守るものをポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・フェイスを守るものをネガティブ・ポライトネスと呼ぶ[2)]。また「FTA度合いの見積もり公式[3)]」によってFTA度合いを見積もり、最も適切と思われるポライトネス・ストラテジーを選択する[4)]としている。

上にも述べたように、B&Lは基本的にある発話行為のFTAを軽減させるための言語的ストラテジーをポライトネスと捉えているが、本研究では聞き手の視点も考慮し、FTA及びポライトネスを、話し手の意図と聞き手の受け取る効果という2つの側面から考える。また、既に行ってしまったFTAに対して後から補償が行われる場合にも、心地よい人間関係の構築や円滑な会話を目指すものとして、言語的・非言語的側面から談話レベルでポライトネスを捉えるものである。

2. 2　文脈化の手がかり（contextualization cues）

Gumperzは文脈化の手がかり（contextualization cues）を、「文脈上の前提を伝えるのに役立つあらゆる言語形式上の特徴」（Gumperz, 1982; 131）として、統語的・語彙的特徴やコードスイッチング、韻律的特徴、定型表現などの言語的特徴を挙げている。これらは発話におけるメタメッセージやフレーム[5)]を聞き手が理解するときに役立つものであるが、文脈に適した推論を引き出すためには会話参加者がその背景知識を共有している必要があると言える。本研究ではこのような言語的特徴に加え、非言語的特徴にもメタメッセージを伝える働きがあると考え、分析対象とする。

3　先行研究

女性の会話スタイル[6)]や言語的特徴については、女性は相手との人間関係を構築する

---

2) ただし、ネガティブ・ポライトネスがネガティブ・フェイスへのFTAに密接に関連しているのに対し、ポジティブ・ポライトネスはそうではない場合がある。例えば「冗談を言う」などがそれにあたる。

3) Wx = D (S, H) + P (H, S) + Rx (B&L, 1987; 76)：Sは「話し手（Speaker）」、Hは「聞き手（Hearer）」を表す。
Wx：ある行為xが相手のフェイスを脅かす度合い（Weight）、D (S, H)：話し手と聞き手との社会的距離（Distance）、P (H, S)：話し手と聞き手との相対的権力（Power）、Rx：ある行為xの、特定の文化における押し付けがましさの程度の絶対的な順位付け（Rank）

4) 以下は順に相手のフェイスを脅かす危険性が低いと見積もられた場合に選択するとされるストラテジー。1. あからさまに言う（baldly）2. ポジティブ・ポライトネス（ポジティブ・フェイスへの配慮）3. ネガティブ・ポライトネス（ネガティブ・フェイスへの配慮）4. ほのめかし（off record）5. FTAを行わない（Don't do the FTA）

5) フレームとは、相互作用中に今何が起こっているのかについての会話参加者の認識のことである。（Bateson, 1972; Goffman, 1974等）

6) Tannen（1984）は「スタイル」を、「何かを行うやり方」であると定義している。そして、人にはそれぞれ歩き方などに「スタイル」があるのと同様に、話し方にも「スタイル」（会話スタイル）がある。Tannenはその要素として音韻、語彙、統語、韻律、リズムといったスピーチに伴う言語的要素を挙げ、非言語的要素である空間上の位置、表情、ジェスチャーなども関連させるべきであると述べている。

ために会話を行い、協調的な話し方をすると結論付ける研究が多く見られる（Tannen, 1990; Holmes, 1995 等）。これに対し Eckert（1990）は、女子高校生の会話を分析して協調的ではなく競合的に会話が進行している例を示し、ジェンダーではなくコンテクストに基づいて研究を行うべきであると主張している。

また「若者ことば」に関して、本研究では従来の語彙・文法レベル[7]ではなく、若者の生の会話をディスコースレベルでポライトネスの観点から考察する。米川（2006）は、若者ことばの心理や特徴として娯楽や会話促進のためのコミュニケーションなどを挙げている。このような心理は陣内（2001）が 21 世紀は親しさ志向のコミュニケーションが好まれると指摘するように、語彙レベル以上のコミュニケーションにも反映され、特徴づけられると考えられる。また、このようなポジティブ・ポライトネス志向は、本研究で扱う大阪に在住の若者の会話には特に顕著に現れている可能性がある[8]。

次に、「対立」に関し、本研究では大津（2004）を参考に、「対立」を「会話参加者が互いに相反する意見、目的などを持ち、相手の発話、構想、相手自体に対して反対する状況であり、同時にそれが会話参加者の少なくとも一方に FTA であると認識されている場合」と定義し、FTA に関わるものと捉えなおす。B&L は、「対立」は本質的にポジティブ・フェイスに対する脅威となると述べている。（B&L, 1987; 66）

Festinger（1957）によると、人は互いに対立するとき不快な心理的緊張（cognitive dissonance）が起こるため、その状況を解決しようという動機が生まれるという。また、Watanabe（2004）は、対立を「和を壊しうるもの、または実際に和を壊すもの」と定義し、意見の違い、発話の衝突などに焦点を当てて分析を行っている。

一方、Schiffrin（1984）は親しいユダヤ人同士の会話を分析して互いの親密さを維持する機能を持つ対立を挙げ、大津（2004）もまた、名古屋の 20 代女性を対象に「遊びとしての対立」[9]に焦点を当てている。これらは見かけ上（言語表現・非言語表現）一般的に FTA となる「対立」的な発話であるが、実際には「冗談」として機能しており、本研究の「対立ごっこ」と共通するものである。それに対し、ジョーンズ（1993）は日本人の家族や同僚の会話における対立場面を分析し、遊びのふりをして反対意見を言うストラテジー（「遊びを装った対立」）を挙げている。これは見かけ上「遊び」であるが、話し手の意図は相手に「対立」することにあるというもので、「対立ごっこ」とは異なる機能を持つものである。

---

[7] 例えば三宅（2002）、窪園（2006）など。

[8] 吉岡（2006）が首都圏と大阪のネイティブを対象に調査したところによると、若い世代になるほど「楽しく話すこと」を重視するポジティブ・ポライトネス志向であると同時に、首都圏よりも大阪のほうがどの世代も「楽しく話すこと」に重点を置く傾向があるという。

[9] 大津（2004）の「遊びとしての対立」と本論における「対立ごっこ」は同じ現象を扱ったものであるが、本論では「対立」との比較を行うため対比的に「対立ごっこ」という語を用いる。

4　会話データ

本研究では大阪府出身・在住の女子高校生を対象に、親しい友人同士1対1での日常会話を分析する。

会話協力者は高校2年生ペア2組、高校3年生ペア6組の計8組16名で、会話収集期間は2005年9月から2006年9月、会話時間はそれぞれ30分から1時間程度である。記録にはビデオカメラとボイスレコーダーを用い、最も親しい友人と二人で会話するときに記録するよう依頼した。また、会話協力者には質問表を渡して会話記録時前後に記入してもらい、後日会話内容についてのフォローアップ・インタビューを行った。記録したデータは文字化して分析資料とする（文字化の規則は巻末参照）。

5　談話例分析

ここでは「対立」と「対立ごっこ」の談話例について分析を行う。

5. 1　「対立」

「対立」が観察されたのは全会話中2例であった[10]。次項に示すように全てのペアに複数箇所見られた「対立ごっこ」とは対照的であると言える。また、それらの「対立」はいずれも、話し手はFTAを行うことを意図していないにもかかわらず、聞き手がそれをFTAとして受け取るという、意図と効果の異なるものであった。本研究ではこのデータに基づき分析を行うため、ここでの「対立」は一般的に「対立」として想定されるような、FTAを意図する攻撃的であるものとは異なることを明記しておく。

《談話例1》 18歳女性C・17歳女性N　（高校3年生ペア／高校の友人・交際歴3年）
記録場所：Nの自宅　　記録時間：60分
状況：「アンガールズ」というお笑いコンビの「山根」（相方は「田中」）に似ているというNの知り合いについて話そうとしている。

15N: でもなー、ちょっとなー、かっこいいって思ったのがーあのー
16 (0.5)
17N: アンガールズの人、おる／／やん
18C: うん　{笑い：フフッ}、いるのそんなん
19N: てゆか、アンガールズっぽい人がおるんよ、／／あのー
【中略】

---

[10]「対立」、「対立ごっこ」の認定に関しては、筆者のほか3名の日本語母語話者に協力を仰いだ。意見の一致が得られない場合には会話協力者本人に会話時のビデオを見せ、直接インタビューを行った。それでも意見の一致が得られないものはカウントしていない。

51 N: 田中は拒否な人多いけどー
52 C: おん
53 N: 山根は別になんか
54 (0.5)
55 C: いい／／の？ (^_^){眉をひそめる}
56 N: いやな人おら、あんま少ないかもね
57 C: えーそうなん？ (^_^)
58 N: 普通ー、でも見たとこ
59 C: えーまじで？ (^_^) (ニヤ)
60 N: いや、それでー／／ほんま、
61 C: おん{笑い：ホホホホ}
62 N: ほんのちょっと、しか似てないよ{下を向く}
63 C: おんおん
64 N: ちゃんと見たら／／あんま似てない／／けどー{下を向く}
65 C: あんあん、あー
66 C: ま言われたらそうかなーみたいな人？
67 (0.7)
68 N: でー、まあ、その人ーがなー

Nは「山根」に似ている知り合いを「ちょっとかっこいい」と評価するが（15N)、Cはそれに対して否定的である。従って55Cでは笑いながら眉をひそめてNの意見に反対であることを伝える。しかし、55C「いいの？」57C「えーそうなん？」59C「えーまじで？」など疑問形の「ほのめかし」ストラテジーを用いて間接的に表明し、また反対意見を述べながらも笑うなどして対立表明のFTA度合いを低くしているものと思われる。韻律についても他の部分と比較すると相対的に高音・低速であり、このような特徴はジョーンズ（1993）の「遊びを装った対立」、つまり反対意見を表明しながらも冗談のふりをすることで対立のFTA度合いを下げるストラテジーと共通しており、CにFTAを行う意図はないものと思われる。しかしこれに対してNは、自らの意見としてCに対峙するのではなく、56N、58Nで一般論として自分の意見を述べ、Cの否定的意見に対して自らのフェイスを守っていると言える。つまりNにとってはCの反対意見の表明自体が、あるいはCの用いたポライトネス・ストラテジーによる補償が十分ではなかったため、この発話がFTAとしての効果を持ったと考えられるのである。さらにNは60NでCの対立表明を打ち切り、さらに自分のフェイスを守るための「言い訳」

を続ける[11]（62N、64N）。その際Nは笑っておらず、下を向いたままで表情・語調とも真剣であり、目立った韻律的変化は見られない。

また、Cは自分の発話が意図に反してFTAになっていたことに気づいてNが自らのフェイスに対する補償を行うことを支持し（63C、65C、66C）、Nのネガティブ・フェイスに対してFTAの効果を与えたことを補償しようとする。しかしそれに対してさえ、Nは66Cを受け流し、自分の話の本筋に戻ろうとしている。

このように、既に犯してしまったFTAに対する後からの補償行為はB&Lのポライトネス理論では説明できないが、談話レベルでのポライトネスとして今後分析の枠組みに加えるべきであると思われる。

5. 2 「対立ごっこ」

「対立ごっこ」の出現頻度にはペアにより3～28箇所[12]とばらつきがあるが、全てのペアに確認された。これは付き合いの長さに比例するという結果は得られず、むしろ個人の会話スタイルに影響されている可能性が高いと思われる。

また、「対立ごっこ」には、互いを激しい表現で批判し合って成立しているものから一方的に相手に「対立ごっこ」をしかけ、相手は笑うだけで終わっているもの、メタ言語レベルで起こっているものや相手の人格自体を否定するもの、韻律の違いによって印象が異なるものまで様々なケースが見られた。

《談話例2》 18歳女性T・18歳女性D（高校3年生ペア／高校の友人・交際歴3年）

記録場所：学校の教室　　記録時間：約40分

状況：記録者が機材や記録に関する説明を行っている準備段階である。本来の会話参加者はTと他の女子だが、教室にはDを含む女子生徒三人が残っていた。

16 T: うん、入ってこんといてや (^_^)（ニヤニヤ）{Dを見る}

17（1.0）

18 T: 特にそこの (^_^)（ニヤニヤ）{体を左右にゆする}{Dを見る}

---

[11] 三牧（2008）は、会話参加者の一方が相手に対して過度にFTAを犯した場合、そのあとで自らに対するFTAを誘導するなどの方法で、談話レベルで見てFTAの全体量に大きな差が生まれないよう是正する行動を「FTAバランス探究行動」と呼んでいる。しかしここではFTAを行われたNは、FTAの追加という形でバランスを取るのではなく、自らのフェイスへの補償をすることで侵害されたフェイスを回復しようとしているように思われる。従来のポライトネス研究には、自らのフェイスに対する補償という観点が欠けている。

[12] このような数量化に関しては、会話の記録時間や「対立ごっこ」の種類・長さなどに違いがあるため、これら全てを同一のものとして扱うことには問題があると思われる。しかし「対立」や「対立ごっこ」の頻度について参考程度にその傾向を把握することは、質的分析を行う本研究においても有益であると思われる。

19（0.7）
20 T: 特にそこの (^_^)（ニヤニヤ）{ 体を左右にゆする } {D を見る }
21（0.5）
22 D: 黙れ {T を見る }《喧嘩口調、「れ」の部分で舌を巻く》
23 T: 整骨院のバイト落ちたやつ { 体を左右にゆする } {D を見る }
24 D: 悪いか {T を見る }《喧嘩口調、「る」の部分で舌を巻く》
25（0.5）
26 D: 整骨院ちゃうわ {T を見る }《喧嘩口調》
27 T: ど／／こ？ (^_^)（ニヤニヤ）{ 目を見開いて D を見る }
28 D: 整形外／／科 {T を見る }
29 T: 整形外科 (^_^)（ニヤニヤ）{D を見る }
30 D: 整形外科じゃ {T を見る }《喧嘩口調》
【中略】
34 D: 消しゴムのカス投げつけたるわ {T を見る }《喧嘩口調》
35（0.5）
36 T: 消しゴムのカス投げたら色んなもん飛ばし返したるからな {D を見る }《喧嘩口調》
37 D: お菓子のカスやろどうせ (^_^)（ニヤニヤ）

T、D を含めその場にいた 5 人は親しい友人である。これは筆者が意図した形式の会話ではないが、記録機器が意識される前の会話で、より自然会話に近いと言える。

会話記録のためでも、T がその場にいる部外者 3 人の中で特に D に対して入ってこないよう伝えることは、D のポジティブ・フェイスを著しく侵害する恐れがあると思われる。それに加え、T は 23T「整骨院のバイト落ちたやつ」と D に関するマイナス要素、侮辱的表現を用いている。一方の D も 22D「黙れ」と喧嘩口調で T を制し、24D では「悪いか」と T と見ながら、巻き舌・喧嘩調子で発話し、30D でも「整形外科じゃ」のような乱暴な文末表現を用いている。その後も攻撃的なやり取りが続くが、これら一連の発話において D は表情・音声ともに笑いを発していない。

この談話例では、言語表現や、音の高低・早さなどの喧嘩腰に感じられるパラ言語表現が特徴的である。発話速度は速く、語気も強い。またそれに加え、これらのやりとりにおいて D には笑いも見られない。しかしこのような一見「喧嘩」に見える表現を用いていても、実際には二人は相手に FTA を行う意図を持っておらず、このやりとりが「冗談」であることを共有している[13]。

[13] フォローアップ・インタビューで二人はこれを「単なるふざけ合い」であり、「いつものことだ」と

また、「対立ごっこ」ではこれとは対照的に、韻律は高音・低速で笑いながら語尾を伸ばし、甘えているような印象を受ける発話も多く観察された。

6 「遊び」を伝える文脈化の手がかり

6. 1 言語的特徴と非言語的特徴

大津（2004）でも述べられているように、「対立ごっこ」が遊びで行われているということは、基本的に論点が取るに足りないことや、文脈から推測できる。しかしここでは「対立」と「対立ごっこ」とを比較し、「対立ごっこ」の中で目立った言語的、非言語的特徴を考察する。これらはそれぞれが個別に表れているのではなく、いくつかが組み合わさって表現されているものである。また、「対立」については前述したとおり、話し手が相手に対してFTAを行う意図を持っているものは見られなかったが、ここではあくまでも会話データに見られたものに対して分析を行うものである。

【言語的特徴】

乱暴な語彙、言語表現の使用　「対立ごっこ」では「乱暴」な語彙や表現（「どっか行け」「黙れ」などの直接的な命令形、「役立たず」「きーっしょ」などの罵倒語など）が用いられることがある。

特徴的な関西弁の使用　有標的に感じる特徴的な関西弁[14]（ウ音便形（「イトーテ（痛くて）」、「ユーテ（言って）」など）や「やかましい」など）も観察されている。方言の使用については、吉岡（2006）が、若者の方言使用の流行に関して、B&Lの「仲間内のことばを使う」というポジティブ・ポライトネスの表れだと指摘している。

韻律の強調　「対立ごっこ」では特に、「高音・低速」「低音・高速」という2種類の強調が目立った。「高音・低速」は聞く者に甘えた印象を与える韻律表現であり、ジョーンズ（1993）の「遊びを装った対立」（実質的な対立）においても確認されているものである。一方「低音・高速」は吐き捨てるような言い方で喧嘩口調に聞こえ、本データにおいては「対立」では見られず、「対立ごっこ」に特徴的に観察された。

【非言語的特徴】

笑い　Kotthoff（2000）は笑いはユーモアを伝える合図であるとし、Straehle（1993）、大津（2004）などもまた、笑いは相手に対する批判的表現に「遊びだ」というメタメッセージを付与して伝達するのに重要な働きをすると述べている[15]。本研究でも笑い

説明する。さらに彼女らは他のメンバーもこのようなやり取りが冗談であることを分かっていると話す。

[14] 佐藤（1995）は音便について大阪在住の人々に対して調査を行い、昨今大阪弁に特徴的なウ音便形が用いられることが少なくなり、代わって東京語と同じ促音便形や非音便形が用いられる傾向があることを明らかにしている。また、年齢が低くなればなるほど促音便形が用いられる割合が多くなり、続いてウ音便長呼形、ウ音便短呼形が用いられるという。

[15] これらは音声データのみに基づいており、笑いの表記についても [laughter] などと記すのみで、表情

は表情・音声とも「対立」、「対立ごっこ」のどちらにも観察されたが、「対立ごっこ」では逆に全く笑いを伴わないケースも頻繁に見られた。

視線、ジェスチャー　「対立」では視線は避けられがちであるが、「対立ごっこ」では多くの場合相手に向けられており、ジェスチャーで相手を指していることもある。B&L (1987) は言語表現について、相手を批判する場合には相手を直接指し示さないように「一般論として言う」などのネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを挙げている。彼らは視線については述べていないが、視線を相手に向けるということは、その対立的発話が相手に対するものであるということを一層強調する働きをすると言える。

また、「対立」では談話例1に見られるように、FTAを受けた側が自らのフェイスに対する補償を行ったり、FTAを行った側が後から補償行為を行ったりする場面が見られ、いずれもフェイスに対する補償が行われている。一方「対立ごっこ」は冗談として機能しているため、一般的にFTAとなる可能性が高いと思われる乱暴な語彙を用いて相手を批判した場合でもそれに対する補償は行われていない。このように、自他にかかわらずフェイスに対する補償が行われないことも、それを聞き手が冗談として受け取ったことを示す手がかりになっている可能性があると考えられる。

6. 2　ポライトネスの観点からの考察

上に挙げた文脈化の手がかりをもとに分析を行った結果、これらは様々に組み合わさり、大きく分けて以下の2通りの方法で伝えられることが分かった。

(1) **協調を示す方法**：「冗談」であることを韻律（高音・低速）や笑いによって直接的に伝える。これはジョーンズ（1993）の「遊びを装った対立」で「遊び」のふりをする際にも用いられている方法であり、協調を示すポジティブ・ポライトネスとして冗談を伝える分かりやすい方法のひとつであると言える。

(2) **見かけ上のFTA度合いを高くする方法**：韻律（低音・高速）や乱暴な語彙、笑わないこと、視線やジェスチャーによって相手を示すことなどは、一般的に対立的発話で用いられるとFTA度合い(見かけ上のFTA度合い)の高い行動である。しかし、話し手が本当にFTAを意図しているならば、このような表現は露骨であり、何らかのポライトネス・ストラテジーが用いられるはずであるという期待がある。この

による笑いや笑いの種類・程度については区別されていない。

ため、このような一見FTA度合いの高い表現を用いることで逆に「これは対立ではない」という聞き手の推論を引き出すことができる。

B&Lが「ある行為者が危険性の少ないFTAに対してより危険性の高いものに対処するストラテジーを使えば、他の人たちは、実際よりもFTA度合いが高いものであると感じる」(B&L, 1978; 79) と述べているように、ポライトネス・ストラテジーは、用いた結果その発話のFTA度合いを話し手がどのように見積もったかということが聞き手に伝わるという側面も併せ持つ。そのため、見かけ上FTA度合いの高い表現を用いることによって話し手がその発話の実質的なFTA度合いを低いと見積もったことが聞き手に伝わり、本気でFTAを意図しているのではなく冗談と解釈できると判断されると考えられるのである。よって、見かけ上のFTA度合いが高まるほど聞き手の推論の確実性も高まると考えられる。

談話例1で、FTAに関する話し手の意図と聞き手の受け取った効果が異なる場面が観察されたように、親密な関係にあっても当然フレームを共有できない場合もあり、またその結果対立的発話はFTAとなりうる。このため「見かけ上のFTA度合いを高くする方法」を用いる場合には、聞き手の推論が適切に引き出されなければFTAは深刻なものになる可能性が高いと言える。しかしまたそれほど危険な表現であるからこそ、このような文脈化の手がかりを用いるにはその推論が引き出されるという確信を持つ必要があり、そのためには互いの会話スタイルに対する知識が必要であるため、二人の親密さの確認としての機能を持つと言える。

7　まとめ

以上の考察により、本研究における会話データでは、従来言われている笑いなどの方法に加え、逆に一見発話のFTA度合いを高くするような文脈化の手がかりを用いて冗談を伝える方法があることが分かった。この方法で用いられる文脈化の手がかりは、一般的に「対立」が持つと思われる特徴である。従って、これが成功するためには「これは冗談である」という聞き手の推論が適切に引き出される必要があり、それには互いの会話スタイルに関する知識が必要であるため、二人の親密さを確認・再構築する働きをすると言えるのである。

また、今回のデータで観察された「対立」はいずれも、FTAに関して話し手の意図と聞き手の受け取った発話の効果が異なった結果起こったものであった。そのため、相手にFTAを行うことを意図しているような罵り合いや喧嘩などの対立場面と、今回の冗談を伝えるための「見かけ上のFTA度合いを高くする方法」とでは、文脈化の手が

かりにどのような違いがあるのかは明らかにすることができなかった。しかし、罵り合いや喧嘩が見られず、また話し手がFTAを犯そうと意図している対立さえ観察されなかったこともまた、彼女らの会話の一つの側面であると思われる。

B&Lのポライトネス理論についても多くの問題が残されている（Eelen, 2001等）。本研究においてもB&Lの発話行為を中心としたポライトネスでは説明できない、非言語情報も含めた効果としてのポライトネスを談話レベルで考察する必要がある場面が見られた。これについては今後体系的に考察していく必要がある。

〈文字化の規則〉／／：／／の後の発話が次の番号の発話と同時に発せられたことを示す。／（0.5）：0.5秒の沈黙／？：上昇イントネーション／、：不自然ではないごく短い沈黙／｛｝：非言語的な行動。笑いの場合、聞き取れた音声を記述／＝：間がなくすぐ起こった発話／(^_^)：表情による笑い。笑い方が特徴的な場合は必要に応じて（　）にその擬態語、様子等を記す。／《　》韻律の特徴、聞く者に与える印象

≪引用文献≫

Bateson, G. (1972). *Steps to an ecology of mind.* New York: Ballantine.

Brown, P. and S. C. Levinson. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. Goody, E. (ed.). *Questions and politeness.* Cambridge: Cambridge University Press. 56-289.

————. (1987). *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge: Cambridge University Press.

Eckert, P. (1990). Cooperative competition in adolescent "girl talk". *Discourse Processes.* 13, 91-122.

Eelen, G. (2001). *A critique of politeness theories.* Manchester: St Jerome.

Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance.* Stanford: Stanford University Press.

Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face behaviour.* New York: Pantheon.

————. (1974). *Frame analysis.* Boston: Northeastern University Press.

Gumperz, J. (1982). *Discourse strategies.* Cambridge: Cambridge University Press.

Holmes, J. (1995). *Women, men and politeness.* London: Longman.

陣内正敬 . (2001).「脱規範時代の方言コミュニケーション」『月間言語』30. (1), 59-65.

ジョーンズ , キンベリー . (1993).「日本人のコンフリクト時の話し合い―アメリカ人研究者から見た場合―」『日本語学』12. (4), 68-74.

Kotthoff, H. (2000). Gender and joking: On the complexities of women's image politics in

humorous narratives. *Journal of Pragmatics*. 32, 55-80.

窪園晴夫 . (2006).「若者ことばの言語構造」『月間言語』35. (3), 52-59.

三牧陽子 .(2008).「会話参加者による FTA バランス探究行動」『社会言語科学』11. (1), 125-138.

三宅知宏 . (2002).「乱れと規則性―品詞転換／省略新語をめぐって―」『月間言語』31. (9), 48-51.

大津友美 . (2004).「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス―「遊び」としての対立行動に注目して―」『社会言語科学』6. (2), 44-53.

佐藤虎男 . (1995).「音便形に見る大阪弁の動態」徳川宗賢・真田信治（編）『関西方言の社会言語学』京都：世界思想社 . 33-52.

Schiffrin, D. (1984). Jewish argument as sociability. *Language in Society*. 13, 311-55.

Straehle, C. A. (1993). "Samuel?" "Yes, dear?": Teasing and conversational rapport. Tannen, D. (ed.). *Framing in discourse*. New York: Oxford University Press. 210-229.

Tannen , D. (1984). *Conversational style*. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corp.

————. (1990). *You just don't understand*. New York: Marrow.

Watanabe, S. (2004). Conflict management strategies in Japanese group discussions. Szatrawski, P. (ed.). *Hidden and open conflict in Japanese conversational interaction*. 東京：くろしお出版 . 65-92.

米川明彦 . (2006).「若者ことば研究序説」『月間言語』35. (3), 20-25.

吉岡泰夫 . (2006).「方言が若者ことばを活性化する」『月間言語』35. (3), 26-33.